

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 5 月 20 日現在

機関番号：12701

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2009～2011

課題番号：21720030

研究課題名（和文） 日中の商人における「義・利」「公・私」観念

研究課題名（英文） A Research on How Japanese and Chinese Merchants viewed the ideas Concern GI RI and KOU SHI

研究代表者

于 臣 (YU CHEN)

横浜国立大学・都市イノベーション研究院・准教授

研究者番号：70433373

研究成果の概要（和文）：本研究は、日中両国における商人の「義・利」「公・私」の比較研究によって、伝統商人の倫理観を解明することができた。そのなかで、文献調査および分析によって、伝統思想における両国の国家観念の相違を明らかにし、商人および商人団体が社会、国家といかなる関係を持っていたかを解明し、両国商人の対外認識と相互理解の特徴を垣間見ることができた。これによって現今の商業倫理問題の解決に「商」のあるべき姿を提示することができる。

研究成果の概要（英文）：In order to resolve the ethical issues occurring nowadays in business, this research aims to outline and compare the traditional merchant values in Japan and China, by examining how they managed the relationship between morality and benefit, as well as between public and private. First of all, it was found that the traditional views of the state in China were quite different from that in Japan. Then, the position held by the merchants and the commercial organizations at the time, towards the local society and the central government, as well as towards the foreign countries was thoroughly discussed.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009 年度	1,400,000	420,000	1,820,000
2010 年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2011 年度	1,200,000	360,000	1,560,000
年度			
年度			
総計	3,700,000	1,110,000	4,810,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学・思想史

キーワード：東洋・日本思想史、比較思想史

1. 研究開始当初の背景

現在、伝統的儒学思想における「義」と「利」、ならびに「公」と「私」の関係をどのように把握すべきだろうか。これは現代の経済人を悩ませている重要な課題でもある。

商人は往々にして「利」のみを貪り、「義」を知らぬ者と考えられている。とりわけ、近

年、食品安全に関する不正事件が多発している。そのため、企業精神や経営倫理などの課題は古くから問われつづけてきた課題であるにもかかわらず、研究者による新しい視座の提示が必要とされる。

一方、上記の食品安全をはじめとする経済界の問題は、単に経済人（個人、企業団体）

自身のモラルの問題にとどまるものではなく、国の政治・社会・経済体制と緊密にかかわりあっている。そして商人と社会、政府と民間（「官」と「商」）、個人と団体、国内と国外の関係等はすべて、経済人がいかに「義」と「利」、「公」と「私」の関係を処理するかによって特徴づけられる。

したがって、本研究は日中両国の商人における「義」「利」「公」「私」という概念を研究の対象に設定したのである。

2. 研究の目的

日中両国の商人における「義・利」「公・私」の比較研究によって、伝統商人の倫理観を解明することで現在、経済界における経済倫理問題の解決に示唆を与えたいと思う。

(1) 新しい史料および文献の発掘と分析を通して、日中両国の商人の「義」「利」「公」「私」にかかわる諸観念の生成、発展と変容の過程を明らかにする。

(2) 前近代の商人の思想を再考することによって、商業倫理と公共性との内在的関連を解明する。

(3) 中国近代商人の会館、「行会」などの商人組織に対して実地および資料調査を行うことで、商人の団体観念、ならびにその団体組織と政府の関係を浮き彫りにする。

(4) 文献調査を通じて、近代日中両国の経済人や実業団体の国際観念および相互認識を理解する。

3. 研究の方法

(1) 比較的方法

日中比較を通じて、前近代および近代両国の商人の全体像の異同を把握できるだけではなく、歴史に鑑みつつ、今後両国の経済界の交流について提言することもできる。

(2) 学際的方法

思想史の限界を乗り越え、社会学、教育学、ならびにフィールドワークなどの手法を総合的に採用することで、より広い視野で日中両国商人の「義・利」「公・私」観念を捉えることができる。

4. 研究成果

(1) 中国における国家観念の解明：

近代中国のナショナリストの先駆者である梁啓超の言論を分析することで「義・利・公・私」概念に関わる中国人の国家観念を解明した。

梁啓超は、彼のある政治・社会背景に基づきながら、古来よりの中国人の国家観念を分

析しながら、自分なりの国家像を描いてみた。そのなかで、彼は「天下」と「国家」の区別を知らない中国人の国民性をとらえ、それが中国人の愛国心の薄弱さにつながっていると、中国人における公德心及び公共心の養成を必要とした。

一方、現実主義者の梁啓超は当時の国民に国家観念を抱いてもらうために、一部の中国人がこれまで持ってきた私利私欲を認めた。こうした利己主義を確保するために、愛国心をはじめとする国民の国家思想を養成することができると彼は見ていた。換言すれば、梁啓超のとらえた国力は個々人の利益に直結しているものである。したがって、彼は個人の利益、「自由」などの権利を守るためでも、自国の実力を増強しなければならないと呼びかけていたのである。

さらに、梁啓超は秩序のことを重視し、社会秩序の安定のため、政府によるある程度の干渉が必要であるとしていた。

なお、第一次世界大戦後、彼は独善的な自民族中心主義を反省し、中国の伝統文化を見直すことで、国家主義の限界を是正しようとした。彼は国家より全人類（「天下」）を視野に入れようとした中国人の伝統的思想を再評価し、中華文明と西洋文明における協力・共存の可能性を展望した。

この研究を通じて、商業倫理の問題を考えるにあたり、国家観念に関わる“公”（国家、地方、世界）の概念をはじめ、両国伝統思想の独自性に配慮すべきだということが分かる。

(2) 商業倫理と公共性の関連性：

前近代商人の「義・利・公・私」観念と公共性の関係について、江戸時代の町人学者である石田梅岩が唱導した「商人道」を再考することで、商業倫理からみる公共性の特徴を明らかにした。

まず現実主義者としての石田梅岩の性格に着目し、他者との連帯意識をいかに形成したのかを考察した。石田梅岩は若い頃から、所有関係における自分と他者の区別を認識できていた。その後、彼は個人の「開悟（悟ること）」体験によって天地、自己、他者との連帯を強靱なものにした。そして、他人との連帯からみる梅岩のいう商人の「利」は、狭い意味での利潤のことではなく、天下「公共」の利につながるものとなったことが見てとれる。

石田梅岩は「天」の「私欲な」さ、もしくは無欲さを通じて人間全体を連関させ、誰でも正直さをふまえて行動すれば、世間が和合することになると楽観的にみている。また自己と他者の一体化を成し遂げた彼は、天に授けられる楽しさを得るために、既存の秩序に

における土農工商という四つの階層はいかにして調和をとることができるかについて考え、「商人道」を唱導した。彼は商人に道徳心の向上を要求すると同時に、ほかの階層に対しても当然ながら要望を出している。すなわち、共存、「共福」の実現のため、私心や私欲をなくすことが最も必要だということである。

こうして、理想的な世間を実現するために必要な道徳理念を唱導せんとする梅岩は、体制を批判するよりも、体制側と大きな親和性を持っていたことが分かる。

この研究を通じて、商業倫理における利他性、すなわち「義」という徳目の大切さが判明する。

(3) 近代中国の「商会」:

中国の商人が主導した商人団体の「商会」(商業会議所)の特徴を把握することができた。

20世紀の初頭に西洋から影響を受けて、設立された中国の近代商会は、これまでの研究ではイデオロギー上の保守的団体としてとらえられ、商工業者の主体性および「商会」の全体像が見落とされてきた。

実に「商会」という組織は、商業と工業との仲介役や全国商業事情の調査、国内外市場の開拓、商業知識の普及、ならびに市場秩序の維持などにおいて近代中国の実業の発展に大きな役割を果たしたということが考察によって明らかになった。

また前近代の商人団体の形態は、「商会」以外に、「行会」という名称も存在し、「会館」、「公所」等に分類されていることが分かる。現在、残された資料を分析することにより、これらの商人団体が抱いた郷土愛の特徴を明らかにした。そのなかで、商人会館は一見、地縁組織のようにみえるが、実は同一地域の他の業界(「業縁」と密接に関係しており、共存(「公共」)意識を示していた。また「商会」は、近代的商人団体であるにもかかわらず、理念上において「行会」との間に連続性のあることが判明した。

こうした検討を通じて、社会秩序の安定における商人団体の必要性、ならびに中国商人における宗族意識の強靱さが分かる。

(4) 実業界における民間交流の可能性:

日中両国における実業家代表団の交流を検討することで、民間外交の可能性と限界を解明した。

1910年6月、清国ははじめて南京で全国規

模の博覧会を開いた。日本郵船会社社長である近藤廉平が率いた渡清実業団は、南洋勸業会に参加しただけではなく、清国各地を回り、現地の紳商らとの会見や交流を実現した。

本研究は、先行研究を批判しつつ、政府と民間、または「官」と「商」の力関係の微妙な変化にしたがって、動態的に当時の日中実業界における「民間外交」の意義を分析した。

まず勸業会の開催に加わった地方官の端方と実業家の張謇を対象に考察したことで、清末に起きた「官」と「商」の関係の変化を明らかにした。すなわち、「官」と「商」は協力・連携し始めたことである。

また張謇をはじめとする地方の紳商の役割からすれば、外国資本と対立する「経営ナショナリズム」の高揚にともなう民力の向上を窺うことができた。そして、渡清実業団の清国での言動を分析することで、両国の実業界における相互認識の不足が判明した。

さらに、当時、美辞麗句とされがちな「同文同種」および日中連携論をとりあげることで、両国の民間外交の可能性と限界を浮き彫りにした。つまり、国境に拘束されない商業の性質に配慮しつつ、実業界の交流をさらに展開することが必要である。しかし一方、実業界の交流は政治と切っても切れない関係がある以上、両国は終始、ライバル意識を持っていることが事実であることも無視することができない。

この考察を通じて、日中両国における実業界交流の重要性、また「越境」による経済界の交流の可能性を窺うことができる。

(5) 商人と国家との関係:

比較の視座より、日中両国近代以降の経営理念を検討することを通じて商人と国家との関係を明らかにした。

まず「公・私」観念からみれば、西洋からの衝撃を受けた日中両国の政府行為及び経営者の活動から「経営ナショナリズム」の特徴が窺える。程度の差こそあれ、後発国としての両国は、経済的近代化を推進するために政府が先導した役割を果たした。こうして、伝統的な商業蔑視観念が是正され、国家の「大義」のために、私利と対極の位置にある「公」の利、つまり、国家の「公」の利を求めることは肯定されるようになる。

なお、実業界からみれば、「商」と「官」との合流がみられ、両国において「政商」(日本)と「官商」(中国)が出現した。両者を比較した結果、日本の「政商」が経営した企業は、政府の殖産興業政策の一環として育成

され、経営者が持っていた国益意識は企業経営の多角化に寄与したことが判明する。これに対して、清末中国の「官商」は、経営活動において「政商」と同じく、国益志向を抱いたものの、私利（家族・宗族のための「利」）も同時に重視したことが分かる。なお、近代的企業の運営にかかわる革新理念からみれば、両国の商人はそれぞれ体制側とある程度の距離を置いたことも拝察される。

この研究によって、国益志向の有無、私利と公益との関係処理における両国商人の異同を垣間見ることができた。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計2件）

①于 臣「近代日中実業界からみる民間外交の一側面—南洋勸業会と近藤渡清実業団を中心に—」、査読有、『北東アジア研究』第23号、2012、pp.149-166。

②于 臣「梁啓超の国家論に関する一考察—国権、国民論を中心に—」、査読無、『横浜国立大学教育人間科学部紀要Ⅱ（人文科学）No.12、2010、pp.1-11。

〔学会発表〕（計1件）

于 臣「近藤渡清実業団と南洋勸業会」、経営史学会、2010年10月3日、札幌大学。

〔図書〕（計1件）

片岡龍・金泰昌編『公共する人間2 石田梅岩公共商道の志を实践した町人教育者』東京大学出版会、2011、320頁（pp.163-178）。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

于 臣 (YU CHEN)

横浜国立大学・都市イノベーション研究院・准教授

研究者番号：70433373

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：